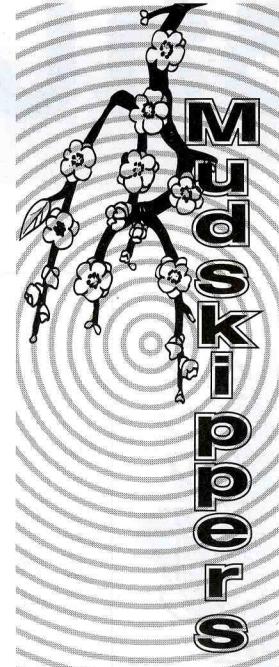


2004

西医体 真夏の競演



第 13 号

2004年10月発行

佐賀大学医学部

〒849-8501

佐賀市鍋島5丁目1番1号

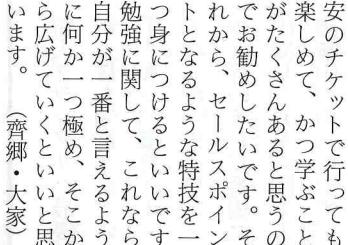
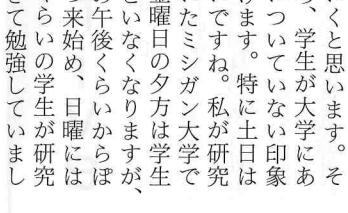
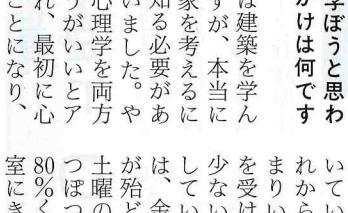
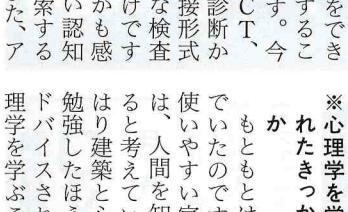
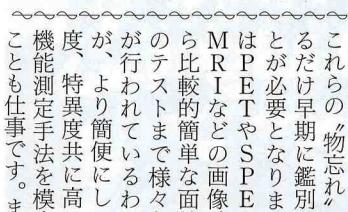
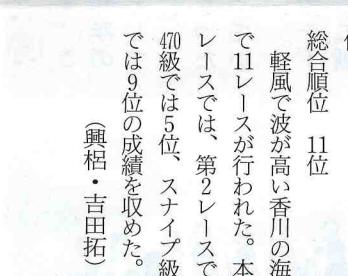
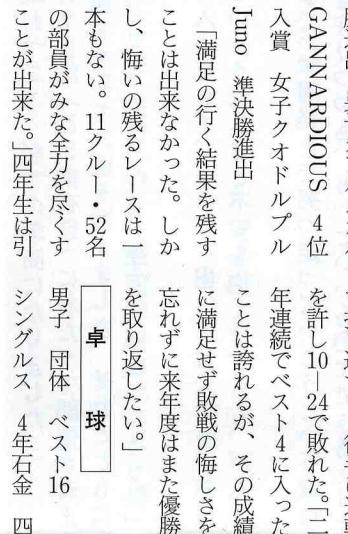
http://www.saga-med.ac.jp/

新聞編集委員会

印刷／株昭和堂



バレーボール

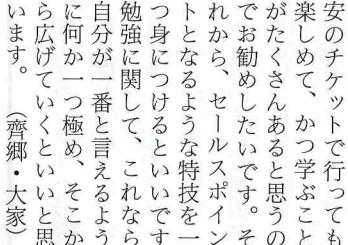
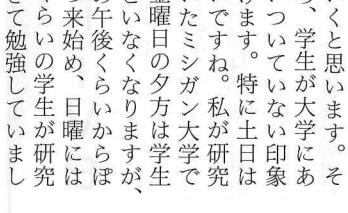
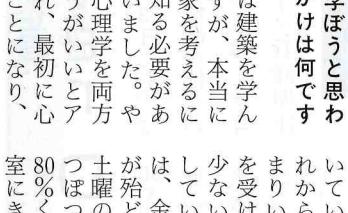
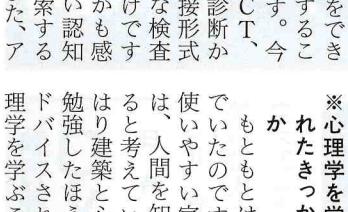
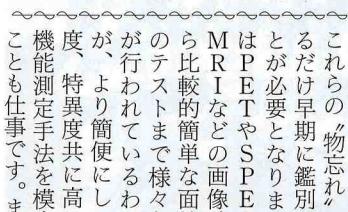
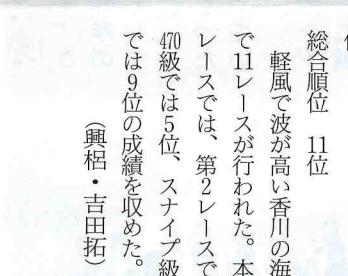
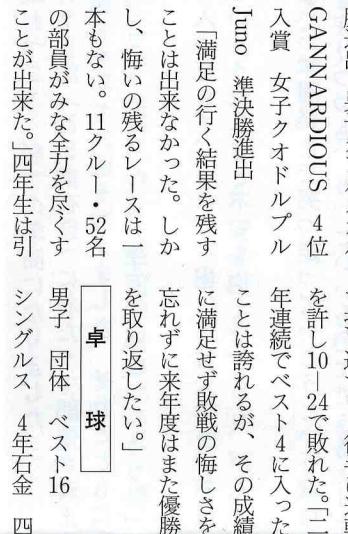


2004

西医体 真夏の競演



バレーボール

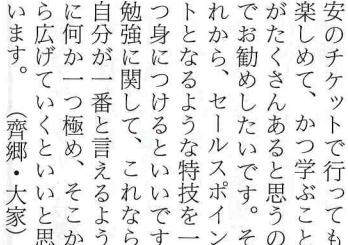
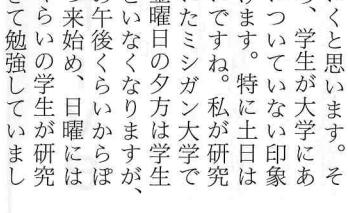
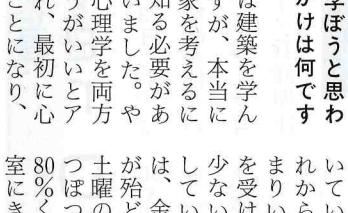
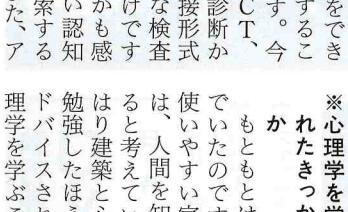
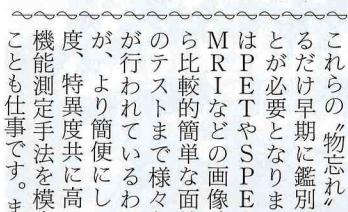
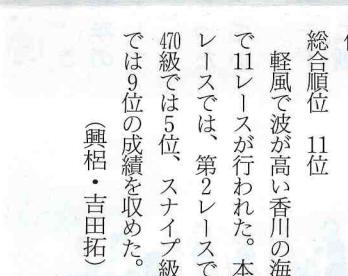
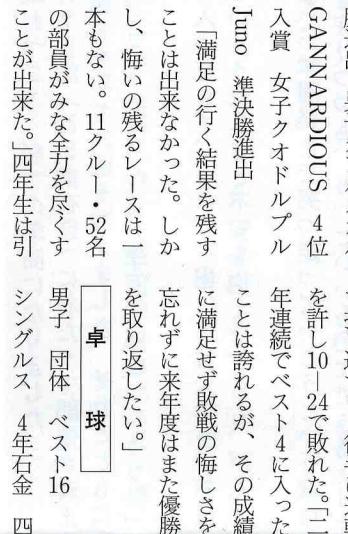


2004

西医体 真夏の競演



バレーボール

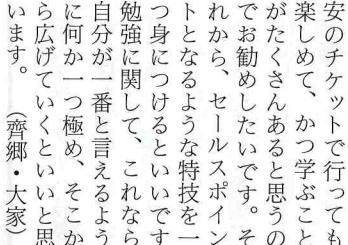
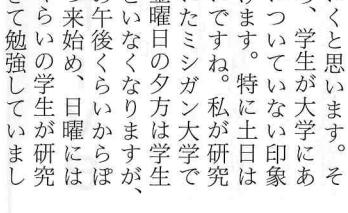
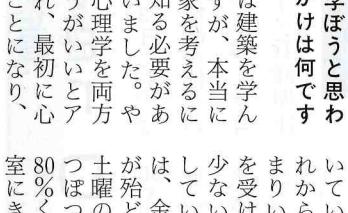
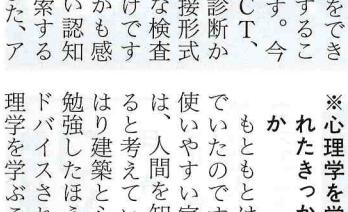
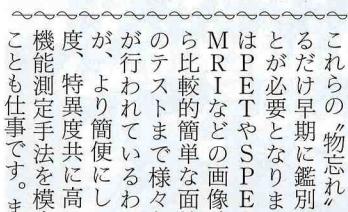
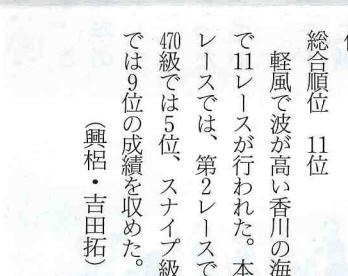
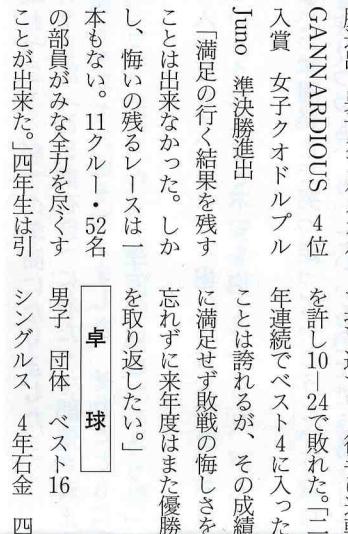


2004

西医体 真夏の競演



バレーボール

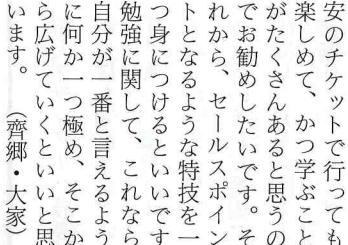
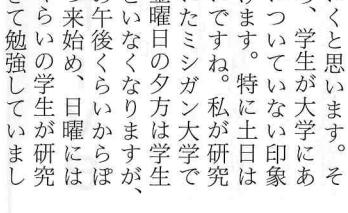
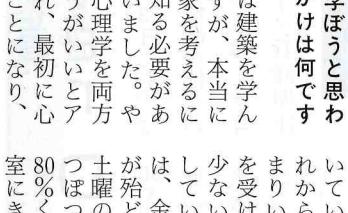
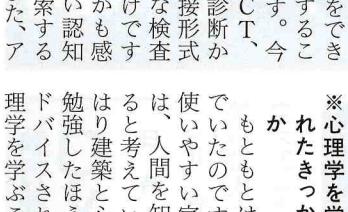
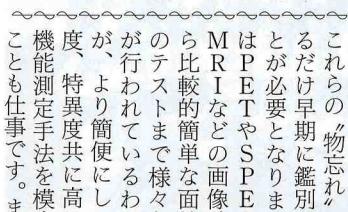
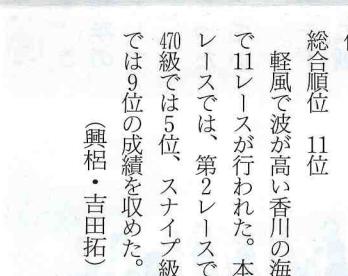
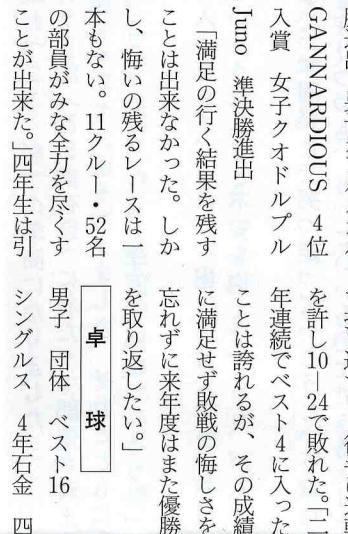


2004

西医体 真夏の競演



バレーボール

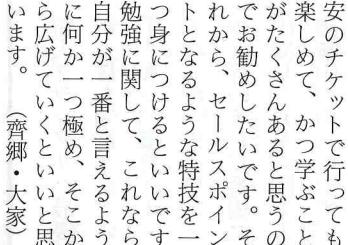
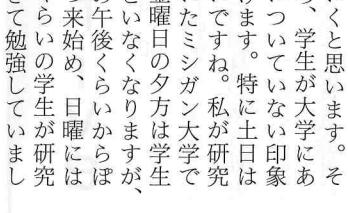
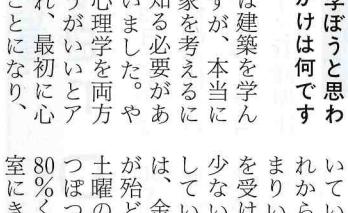
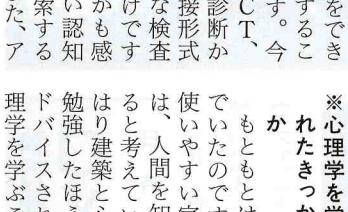
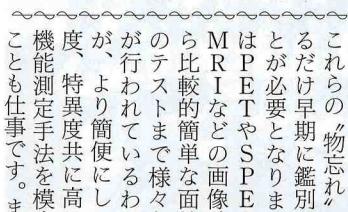
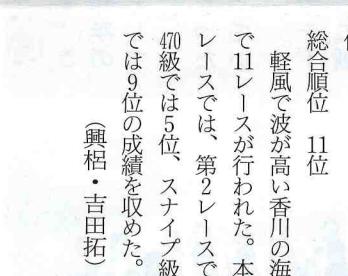
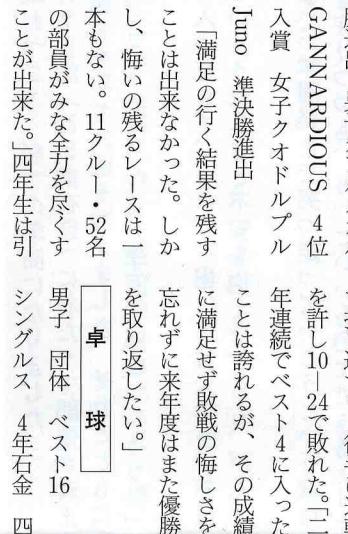


2004

西医体 真夏の競演



バレーボール

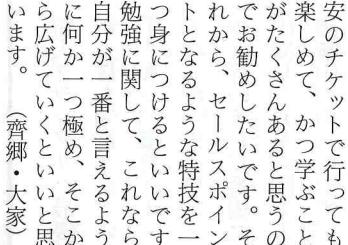
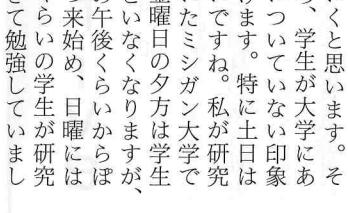
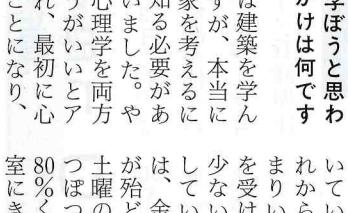
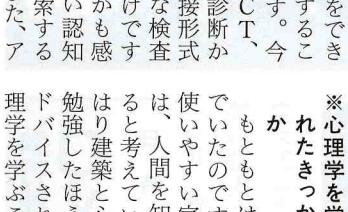
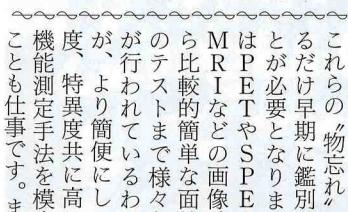
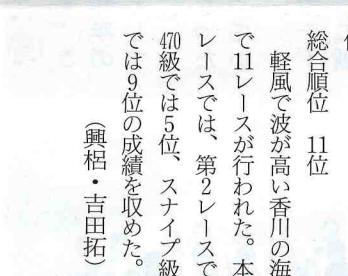
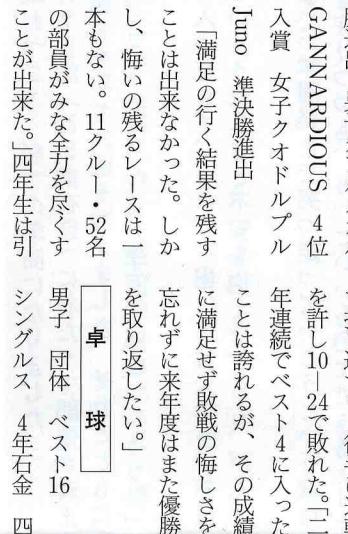


2004

西医体 真夏の競演



バレーボール

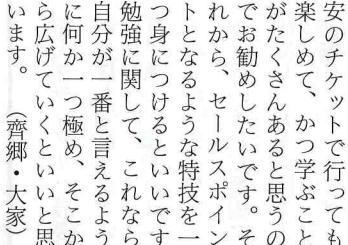
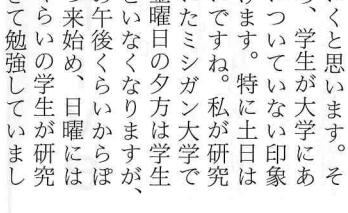
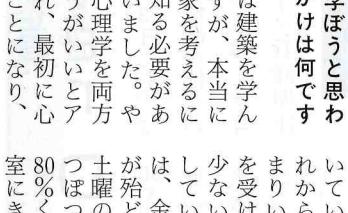
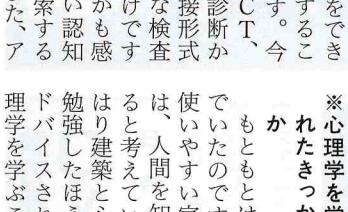
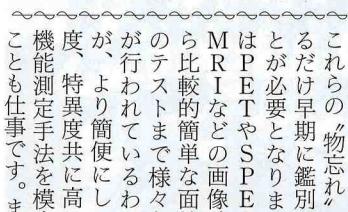
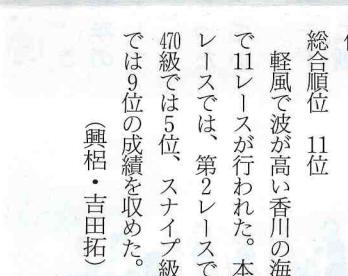
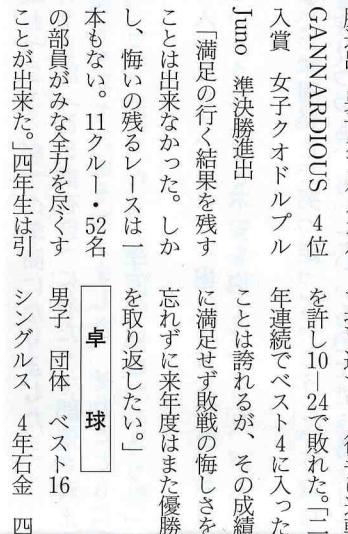


2004

西医体 真夏の競演



バレーボール

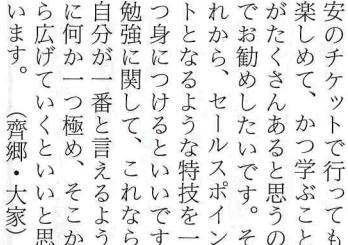
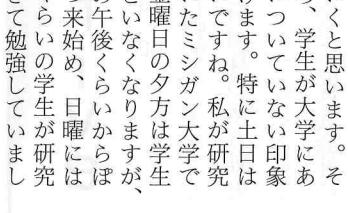
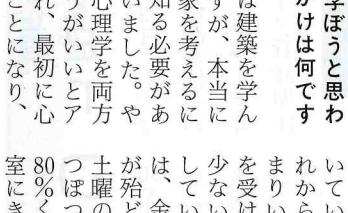
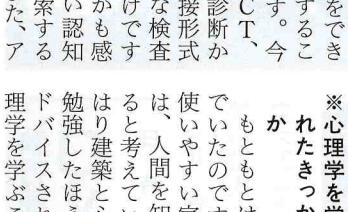
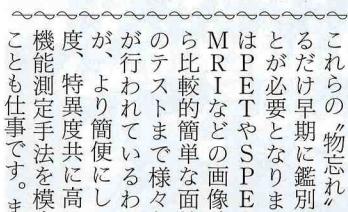
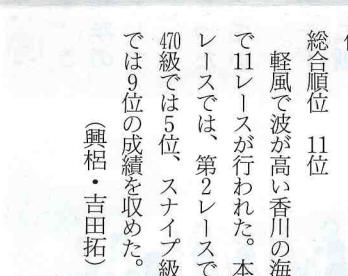
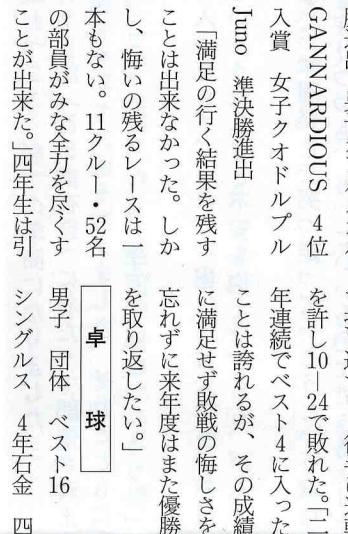


2004

西医体 真夏の競演



バレーボール

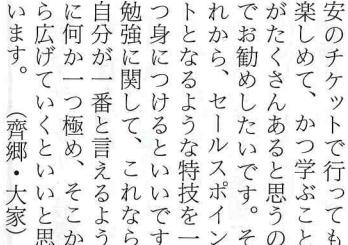
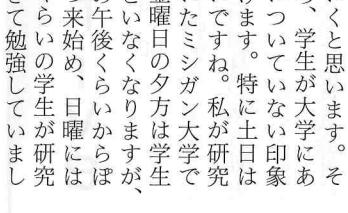
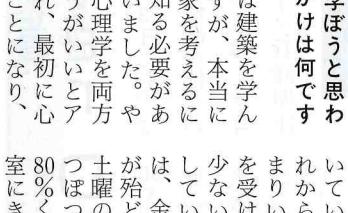
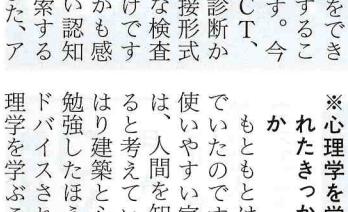
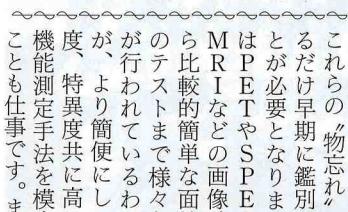
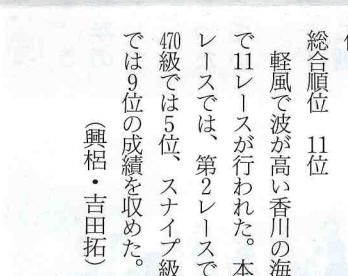
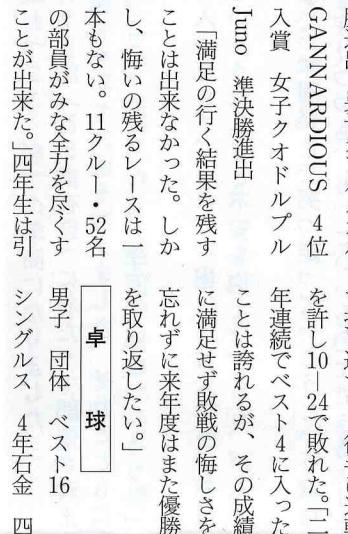


2004

西医体 真夏の競演



バレーボール

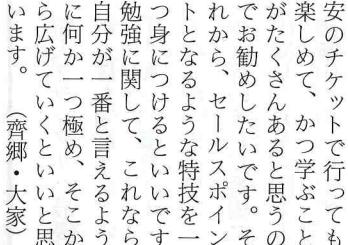
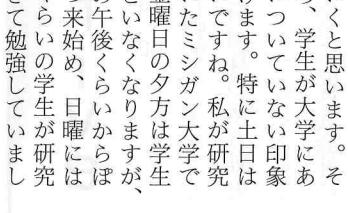
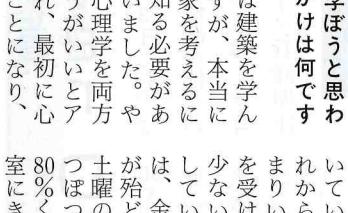
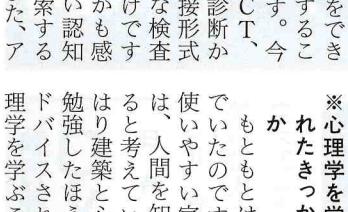
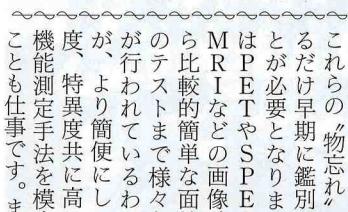
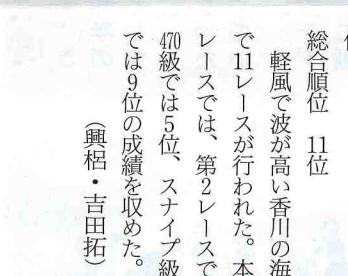
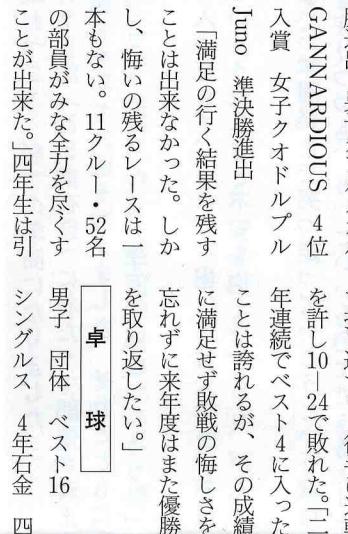


2004

西医体 真夏の競演



バレーボール

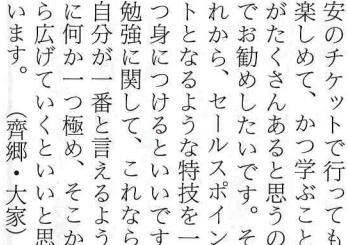
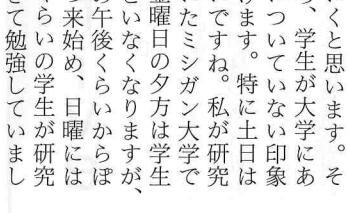
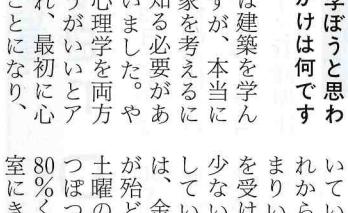
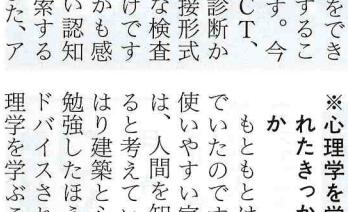
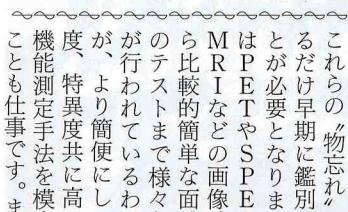
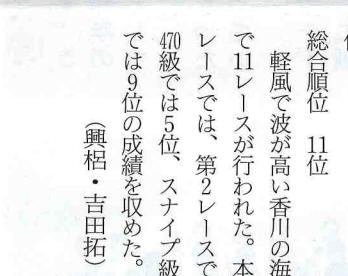
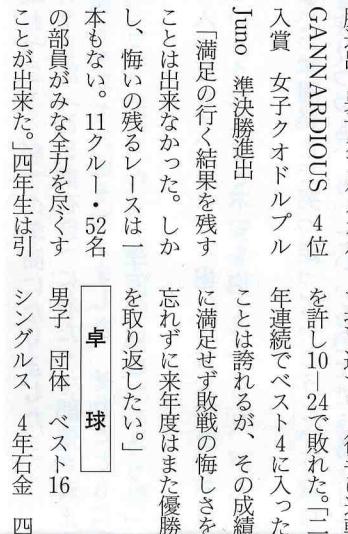


2004

西医体 真夏の競演



バレーボール

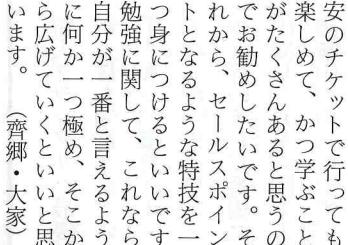
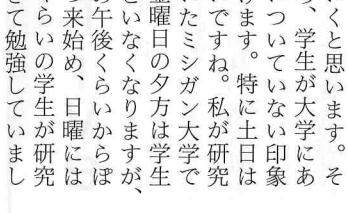
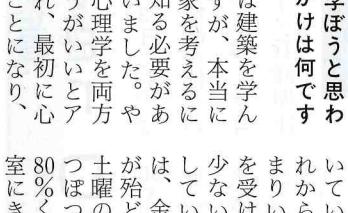
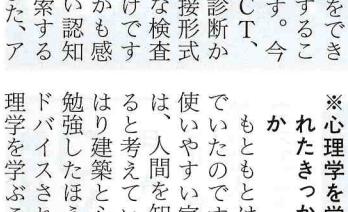
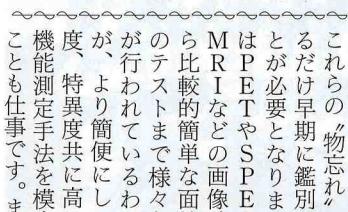
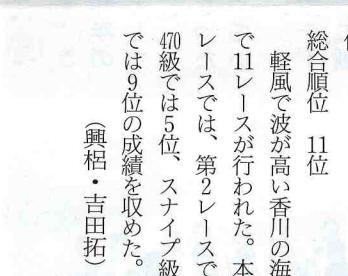
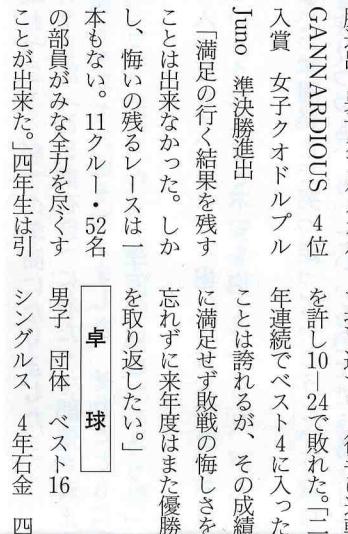


2004

西医体 真夏の競演



バレーボール

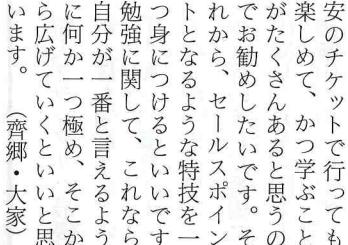
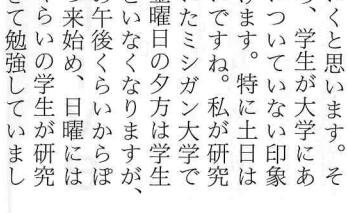
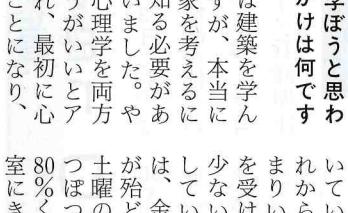
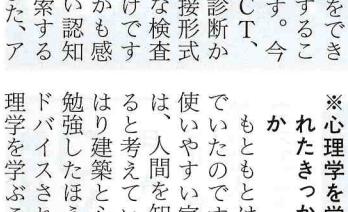
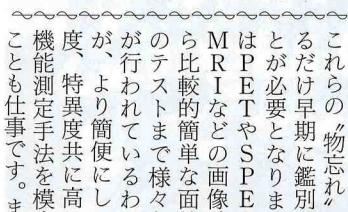
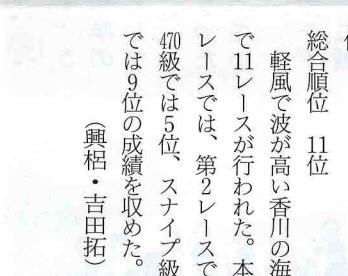
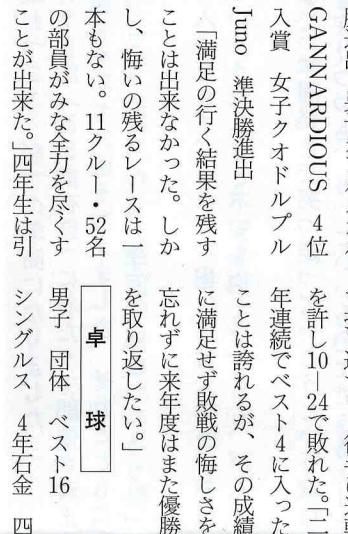


2004

西医体 真夏の競演



バレーボール

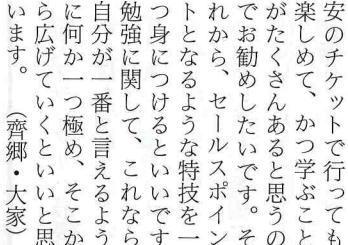
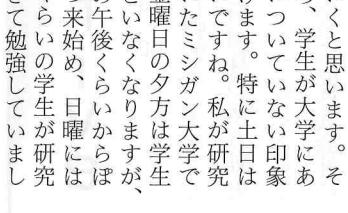
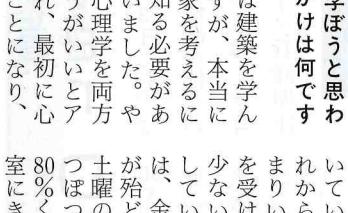
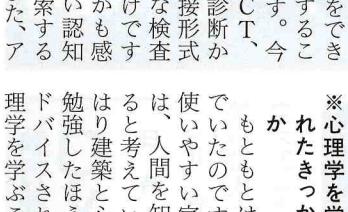
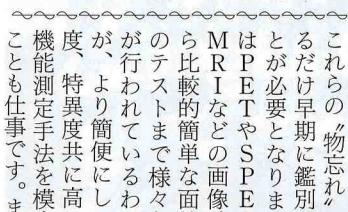
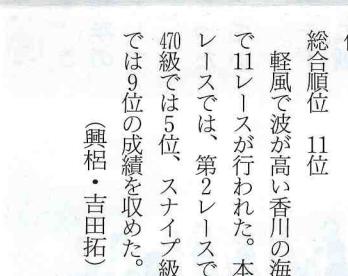
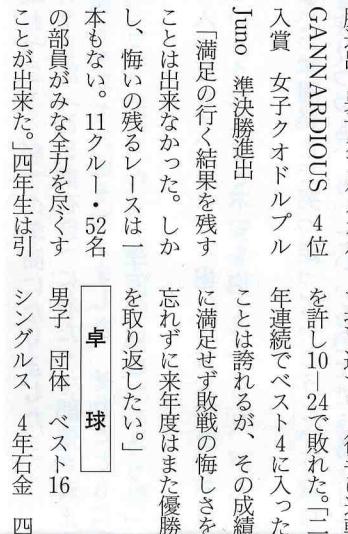


2004

西医体 真夏の競演



バレーボール

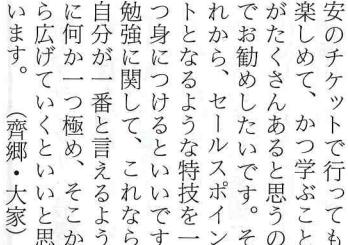
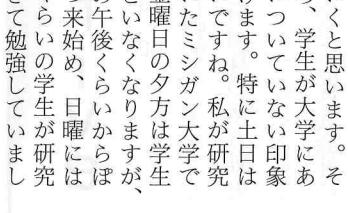
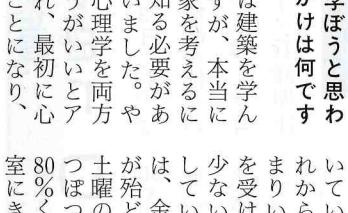
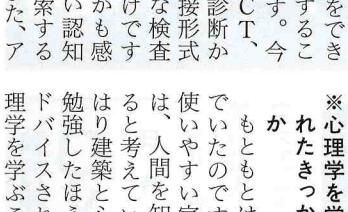
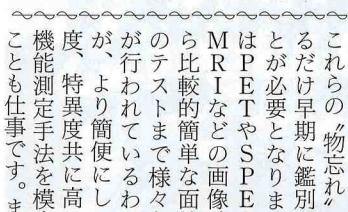
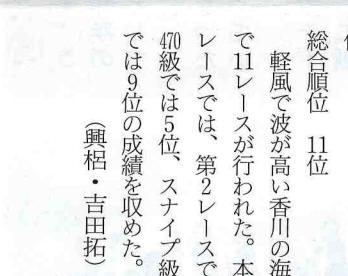
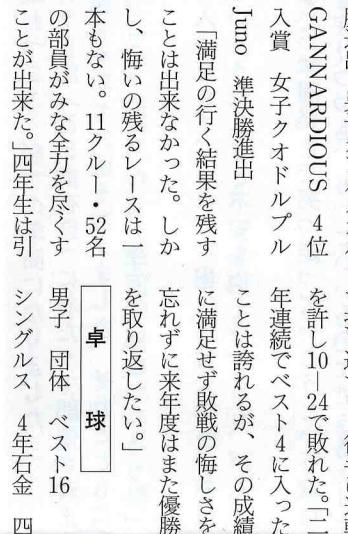


2004

西医体 真夏の競演



バレーボール



2004



に関して聞いていたんやけど、大学内では一応ネクタイをつけるなど、皆フォーマルな格好やつたな。ただ、雰囲気がフォーマルかとするとそうでもなくて、まず学内に入るなり、皆が笑顔で迎えてくれたのがすごい印象に残ってるよね。日本人に對しても好感的なイメージを持つっている人が多かったのかもしれないけど、僕たちみたいな突然の見知らない訪問者に対してもすごく温かく迎えてくれたよね。講義が終わっても「今日の予定はどうするの?」って、毎回聞いてきてくれて、普段、彼・彼女らが行っている食事が出来る場所や遊びにも色々と連れて行ってもらつたんよね。

N—そうやね。逆に、海外の学生がこちらの大学に來た時に、あいだつた雰囲気で迎えて接してあげられるかといつたら、なかなか日本人には難しいなという印象はあった。その辺りの雰囲気は、講義などにも表れていて、一言で言えば、"Interactive"。先生が"Do you understand?"(分かったかな~?)と聞くと、学生が「NO!!(わっかりつ

ませーん！」（大合唱）みたいな感じの繰り返し。講義が多すぎるとの批判も浴びているようやつたけど、面白いもののが多かつたようだ。出席率もメチャ高いし。それは理由もあって、向こうでは、教える事を専門にした講師がおるねん。だから、教え方が上手やし、内容も濃い。みんな医学教育に高い興味を持つてて。IMU のカリキュラムはどうな感じなのでしょうか？それも、日本と違つてますか？

――色々な事が衝撃やつたなあ。まず、5 年で卒業なんよね。それで、始めての 2 年半がいわゆる大学での勉強、その後の 2 年半が、海外の提携大学病院を含めた実習期間になつてる。生化学や行動科学などの基礎医学は 1 年生から始まり、後期からは本格的に PBL も始まつて、呼吸器、循環器という風に臓器別に勉強していくくんよね。詳しい基礎医学も PBL の中で学んでいくから、例ええば日本でいう「解剖学」や「生理学」つて分け方はないねん。「呼吸器」のシステムに入つたら、その中で「肺」や「気管支」の解剖や働きを皆で学んでいくという感じで。その違いには、結構ビックリやつたな。また Clinical Skill Unit (CSU) といふ者さんを使用して面接の仕方や手技、レントゲンの見方など臨床に即した

佐賀大学でも話題のそのPBLですが、IMUでのそれをもう少し詳しく議論が活発、だつたつて事かな。皆が、自分の考え方や疑問をぶつけ合って、とてもinteractiveで良いなと思った。

I-PBLを見学させてもらつて感じた違いは、講義でも共通した雰囲気だつたんやけど、「とにかく議論が活発」だつたで事かな。皆が、自分の推論していくこと) が大きい位置を占めるハワイ大学のPBLをモデルにしているやろ。それに伴う床推論にこだわらず、その症例をもとに基礎医学を学習することが念頭に置かれている。結果、佐賀では1症例A4.5枚に及ぶのに対し、IMUではA4.1枚。またディスカッションに掛ける時間も、佐賀3時間に対して、IMU 1時間半程度となっている。という訳で、同じPBLではあるけれど実際経験してみると全然違う。ただ、ディスカッションが大事な点は変わらんと思うわ。IMUの中でも、マレー系の学生はしゃべりな人が多かったりと、育つ環境で違があるというのも面白いな。

については、久留米大学医学部の吉田先生、国際医科大学の大西弘高先生による本『実践PBLチュー
トリアルガイド』が最近出版されたので、それを参考にしていただければと思う。

英語は大丈夫でしたか？

——僕は、大変でしたね。

ただ、医学英語的なものは、日本でも少し英語でやっていたから、講義で知っている範囲だと医学英語さえ聞き取れたら理解出来た感じかな。ただ、PBLでの活発な議論や、学生との日常会話となると、わからない事が多かったな。でも、その辺は乗井さんがある程度フォローしてくれたり、学生らもメツチャ温かい人達が多くて、楽しかったな。そして、実は向こうの学生も、決して英語が母国語ではないから、最初は英語での講義もついていけない人もいるらしいし、普段の会話は、例えば中国系の学生同士なら、中国語になつてしまつ。

N—大学内に「SPEAK ENGLISH ONLY!」と書かれたポスターが貼つてあつたしなあ。だから、皆、英語での医学の勉強や会話もすごく努力しているなあと思つたな。そして、その辺りの意識は日本の学生は非常に低い気がするな。

I—PBLに関して言えば、この前ハワイの学生のやりとりを見ていても思つたけど、皆がとにかく楽しんで活発に意見を述べていた気がするわ。



文化書庫の窓辺にて 戦争の記憶

最終回

文化書庫の 戦争の

窓辺にて の記憶

最終回

生運動も遙か昔、飢えも貧困も無縁の時代に生まれた私は、戦争というドラマの孕む途方もない複雑さに自分の無知を恥じながら、しかしだからこそ戦争の本当の姿を知る

「卑しくも分別ある者は戦いを避けなければならぬ。しかし一旦戦いが始まれば國のために潔く死ぬのは男子の面目、為所を得ないのは恥辱と言わねばならない」

Page 1

文化書庫の戦争の記憶

「敗れた者は泣き、勝った者は笑んだ」
〔ブルターチ英雄伝〕

デモスチネス篇
予言の歌より

病棟実習に出ていると
いろいろな患者さんと出

会うが、短いお付き合い
にも関わらず思い出深い

方がいるものである。そ

の中に私の祖父と同じ年
のご老君がいらっしゃっ

た。学生の特権でいろいろ

とお話をしているうちに、偶然にも祖父と同じ

時期に中国に出征し、ビ

ルマで終戦を迎えた

ことを知った。実習の合

間に戦地のこと、復員

されてからのお話など聞

かせていただき、私も祖

父から聞いた戦地でのこ

と、毎年祖父と弟と三人

で年一回行われる菊兵团

の慰靈祭に参加している

ことをお話をした。私と

同年輩のお孫さんたちが

幼いころ、よく戦地の話を

寝物語にされていたと

して、戦争の記憶が確

旅行記か冒險談のようなものだつたのだろう。それが年を経ることに、祖父の話には生々しい一面が垣間見られるようになつてゆく。戦場で直面した現実、そのとき考えたこと、復員して目にした故国の姿、戦争体験を通して現代の日本に思うこと。高校生になつた私は祖父の話に耳を傾けながら、それを自分の境遇に重ね合わせてみた。松林宗恩の「連合艦隊」を見返して、空に、海に、陸に散つていた若者たちの境遇を思った。「発艦することができても着艦することはできませんから、敵艦に体当たりします」とゼロ戦の整備員に詫びを入れにきた少年飛行兵の姿に胸が詰まつた。本映画の製作に駆せ参じた数多くの名優、戦争を知る世代の胸中はいかばかりであつたか。

「戦争は巨大なドラマである。一人の人間の尺度で測るには、あまりにも大き過ぎる全体である。その中には、不正なものもあるであろう。しかし、戦争の良い部分というのも、また確かに在るであろう、私は思つた」
〔秋山駿「こころの詭計〕
ド・イツ映画「Uボート」では、第二次大戦の大西洋で繰り広げられたナチスドイツの潜水艦と英軍駆逐艦の死闘がリアルに描かれる。乗組員は不安を忘れようと酒場で酔いつぶれ、英軍軍歌を歌い千年王国の野望など鼻から信じていない。海底で水圧に軋む船体、爆雷攻撃で艦内に浸水し、乗組員は恐怖のあまり我を忘れる。一向に好転しない戦況に苦悩する艦長が、無精髄を蓄えて食卓を囲む様は「最後の晩餐」に望むキリストを思わせる。そして圧巻は幕切れ、艱難辛苦の末任務を終え、喜び勇んで帰港した彼らを待つていたのは、英軍の大空襲だつたのである。

共に湾内に沈むUボート、さながら地獄絵図となつた港を映し出しながら、映画は幕を閉じる。京都大学教養学部の前の教授だつた竹市明弘氏が「久しぶりにsachlichな映画を見た」と嘆声を漏らしていたそうだが、そこには一抹の感傷の入り込む余地もない。鷗外晩年の筆致を思わせる描写に圧倒されながら、人間が歴史という巨大な潮流の中ではいかにちっぽけな存在なのか、改めて思い知らされる。情緒を排した冷たい詩情に醉い痴れながら、戦争で浮世の由無之事など吹き飛ばされてしまう様に、現代人の私は却つて爽快さを憶えてやまない。ひょとするとこれも、戦争の「良い部分」なのかもしれない。今井正「あゝ声なき友」では、復員兵が戦友の遺書を配達しながら、銃後の悲劇、戦争の傷跡を目の当たりにする。淪落に身を堕とした戦友の妻、元戦犯の父は「死にたくない、お父さんを恨みます」という息子の遺書を受け取り、人々は戦争のことなど忘れ去り、華々しい戦後の繁栄に酔つてゐる。日本が誇る名優渥美清扮する復員兵が戦争への怒り、戦争を安易に忘れてゆく大衆への怒りが満ち溢せる。ルノワールが「大いなる幻影」で描いた粹なフランス人の怒りとも違う、デ・シーカの「ひまわり」の陽気なイタリア人の怒りとも違う、確かにそこには日本人の、戦争への静かな怒りが満ち溢れていた。一人の復員兵が清貧の中、八年間もかけて津々浦々遺書を配達して回るという少々強引な設定に、私はより一層戦争の残酷さ、戦争について話すのは困る、とアランは言った（暴力の敗退）。確かに太平洋戦争どころか、朝鮮特需も学

生運動も遙か昔、飢えも貧困も無縁の時代に生まされた私は、戦争というドラマの孕む途方もない複雑さに自分の無知を恥じながら、しかしだからこそ戦争の本当の姿を知るうとしなければならないと思った。

「戦争を始めるのはたやすいが、終わらせるのは難しい」最近テレビでこうバツシューを批判していた。戦前の日本が、いとも簡単に太平洋戦争に入したかのように報じるメディアの口調によく似ている。本当にそうだろうか。確かにそこには、巨大な権謀術数が渦巻いていたことだろう。やむを得ない、と押し切られた人間的な弱さもあつたかもしれない。だから私はこれまで、戦争は一握りの人間の悪意によって、理性的判断によつて引き起こされると説き、なぜ戦争を起こすのか、戦争をして人を殺したいのかと口にする人たちに疑いを持つてきた。なぜ戦争が起ころざるを得なかつたのか、と半ば自省を込めて考えようとしたしないのか。戦争責任者を裁判で裁いて極刑に処したといふ事実にも、何か相容れない違和感を覚えた。現代人はどんなに事態が紛糾しても、話し合いで容易に戦争を回避できるほど賢くなつたと信じているのか。それともゲーム感覚で戦争が起ることでも本気で考へているのか。人命尊重を至上命題と叫ぶ多くの人たちの言葉の中に、私は人間が生きるということに対する切実さをどうしても感じとることができない。戦争といふ巨大で複雑なドラマを前にして、現代人の態度はあまりにも稚拙ではあるまいか。「戦うも亡国、戦わざるも亡國、戦わずして滅びるのは、民族の魂まで失う真の亡国である」眞珠湾に殺到した当時の若者たちは、そのように信じていたという。国のために死ぬなど古臭い、近い将来国家はなくなつて世界国家ができるなどといったところで、これまたはかない夢物語である。

（エウリピデス）
「トロイの女たち」

今も昔も、人間はこうい
う倫理で生きているのだ
と私は信じている。彼ら
は戦争の良い部分を、自
分の身を代償することに
よつて果たしていったの
だ。戦前の若者は、ファシ
ズムの狂気に翻弄された
のではない。そもそも戦
死者に、戦争の中の良
い部分を遂行してきた者
と全く異なるものであつ
た。だが戦後日本は彼ら
に戦争の孕む複雑さ
に対しても、一体どれだけ
の言葉を贈つてきただろ
うか。彼らの尊い犠牲の
上に、戦争の孕む複雑さ
を無視して陳腐なヒューリ
マニズムで武装した偽善
だけが残されたとしたら、
これもまた大きな悲劇で
はあるまいか。そして戦
後六十年、悲劇は今なお
世界各地で続いている。イ
ラクやロシアの惨状はた
だただ目を覆うばかりで
ある。戦争のない世界、そ
れは祖父の、あのご老君
の、大東亜戦争二百五十
万の英靈の願いであると
思う。私の祖父は六十五
年前、戦争の真っ只中に、
薄暗く蒸し暑いビルマの
ヤンゴンの中に立つて
いた。私と同じ二世代の
祖父は青春の全てを捨て
て、そのエネルギーの全
てを戦争に費やした。私
の心にはほんの一部に過
ぎないかも知れないが、父
親の見た風景が、紛れ
もない戦争の記憶が確か
に刻まれている。そのこ
とを私は誇りに思い、幸
せだと思う。この戦争の
記憶こそ、たとえ小さく
ても悲劇を繰り返さない
礎たりうると、私は信じ
てやまないのである。

